

▲ ▲ ▲ 冥途の土産に大風呂敷を ～10年前の夢幻譚～ ▲ ▲ ▲

(2021年9月23日 記)

2020年の春からこの1年間半、コロナ禍で外出もままならず我が家の狭い兎小屋に閉じ込められて悶々鬱々として過ごしてきた。一日中ボ～ッとして過ごしているとコロナ神経衰弱症候群が充進するだけなので、我が山の神サマは下記のようなご宣託をノタまわれた。

曰く、西方浄土からの阿弥陀如来サマがお迎えに来られた時に失礼が無いように、押し入れに放り込んでいる濡れ落ち葉のガラクタ類や乱雑に積み投げられている書籍などのゴミ処分を未だ足腰が立つ内にちゃんとやっておいて頂戴ヨ！残った家族には単なるゴミだからネ。何をぬかすか、コン畜生メ！

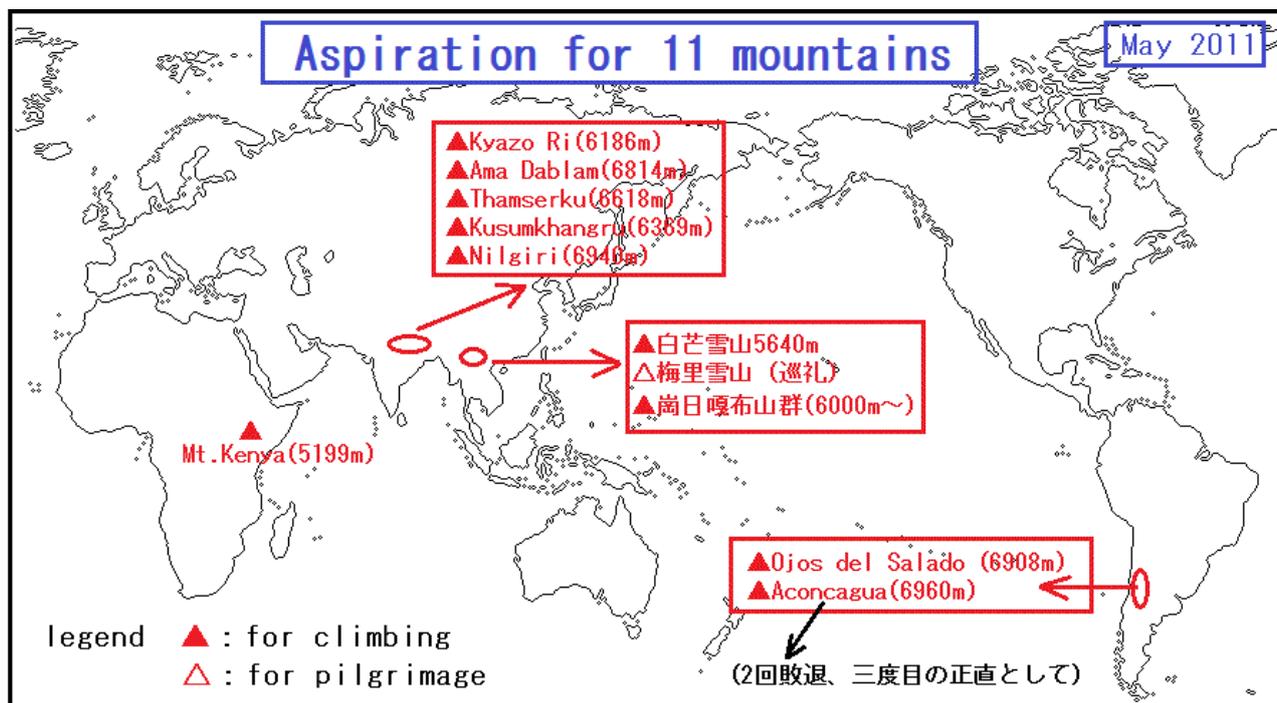
そういう訳で、山の神サマのご宣託をせつせと守り過ぎて益々腰痛が激化し、足腰が立たなくなってきたので、今度はマウスの手先だけで出来るパソコンのゴミ掃除に取りかかった。30年近く溜めこんできたファイルは大方が腐って黴が生えていて見るに忍びないシロモノであった。PCに保存されていた殆どの駄文や写真は書いたことさえ忘却の彼方へ飛び去っているものばかりであったが、僅かながら往時のことなどが彷彿となってくるメモなども混じっていて懐かしかった。

そのような掃除の手休めに^{ほしく}穿り出したモノをご参考までにご披露したい。実は10年程前に或る山岳会で山岳救助訓練の講師を仰せつかった折に、負傷者抱上げ搬送法のデモで重量級の負傷者役を抱上げた際に背骨がポキッと音がして脊椎を2箇所圧迫骨折し、足腰が立たなくなって山にも行けず2年間ほどゴロゴロと半分寝て過ごした時の、夢のまた夢をウジウジとベッドの上で夢想したシロモノである。

恥ずかしながら、今から思えばよくこんな出鱈目大風呂敷が広げられたと汗顔の至りであるが、この時は^{よわい}未だ70歳、骨折から回復すれば多少は山の方も再開できるかと大風呂敷を広げて大法螺を吹いたのであるが、マ、その大風呂敷の三割くらいは何とか実現に漕ぎつけられるかも知れないと密かに目論んでいた海外山行の目標案件であった。

しかしながら、山の女神は微笑まなかった。2年後に脊椎骨折が治ったと思ったら、今度は更に頸椎骨折で2ヶ月間入院、またその5年後には腰椎を2箇所骨折し、齢八十路に近づいた現在までコロナ禍での外出自粛も加わって山には全くのご無沙汰、心技体ともヨレヨレに相成ってしまった。

左様な次第で、自慢ではないが今はこの大法螺の実現確率は万に一つも無かったと自信を持って言えるが、マ、当時は何とかなって見たいと大真面目で調査研究検討をしたものだった。下図は当時夢想した“冥途の土産11座～10年前の夢幻譚～”である。



この内、実際にトライできたのはネパール・ヒマラヤのキャズ・リ峰 (6186m) 1 座だけであり、実はこれも中途敗退という結果と相成った。即ちこの^{ゆめまぼろし}夢幻の達成率は僅か $1/11 \times 50\% \approx 5\%$ 、ああ情けない。(この時の山行記は <http://yamanami-harukani.world.coocan.jp/travels/kyazori.pdf> をご覧ください)。

それ以降、上図以外の海外登山には何回も出掛けたが、それらは比較的標高が低くしかもアプローチもそれなりに簡単な欧州アルプスやアメリカ・ロッキー山脈の山々であった。

上図の目論みの内、残る 10 座は、2 回敗退した経験がある南米アルゼンチンのアコンカグア峰を除けばロートルの小生には最早山麓の登山口にさへ辿り着けない体たらくであることが哀しい。

扨て実は、このような見果てぬ夢に浸って見たのは、岳友の大先輩であるナカさんと今後どのような山 (海外の山) を目指したいかを語り合った時に、話題が登山の精神にも及び、素人山好きの我々にとってのアルピニズムとか、パイオニア・ワークとか、初登頂を狙う山とか、ボタ山登山とか、物見遊山とか、これらの登山の種類をどのように位置づけて登れば良いのか、或いは高名な某クライマーが主張するような「より困難で、より新しい登山を求める孤高の登山者だけが真のアルピニストであり、「初」が取り柄のボタ山未踏峰、8000 メートル峰ノーマルルート、ヒマラヤ〇〇峰女性初登頂、まして今を時めく中高年登山などという登山には登山の価値は認められない云々・・・」などという言辭は一体どう解釈したら良いのだろうかなどと口角泡を飛ばしたことがあって、この時の論議に刺激されてこれから傘寿になるまでの 10 年間程で行って見たい海外の山を自分なりにピックアップしたものであった。

これらの山々は、アコンカグアを除けば、本邦の有名な山岳ツアーサービス会社でも殆どツアーには組み込まれておらず、現地のガイドツアー会社もいくら金を積まれても案内したくないという部類に入る山々である。山が辺境に位置しているためにアプローチ自体の手段が無かったり、登攀の記録も少ないのでルートも無く、危険個所も予測できず、荷揚げ作業なども困難であったりすることから、標高は高くないがそれなりに工夫を要する山々というべきだろう。

前述の某著名クライマーに言わせれば、これらの山々は“登山の価値なし”の部類と烙印を押されるかも知れないが、それは物は考えようというもので、彼がメスナーと争ったとかいうナンガパルバットの未踏壁や K2 北壁の新ルート開拓 (言葉は悪いが重箱の隅) だけがアルピニズムの神髄でもなければパイオニア・ワークでもなかつたと思うのである。

扨て、余談が過ぎたが、上記の山々の詳細は割愛するとして、若干の蛇足を述べてみたい。

- (1) ヒマラヤの東 (現在は「ヒマラヤのアルプス」とも呼ばれるチベット高原東部～中国最奥部の横断山脈) にある白芒雪山 (バイマイシュエシャン、5640m) や崗日嘎布山群 (カンリガルポ、6000m～) は、未踏峰がゴロゴロしている辺境にあり、また治安が悪い地域なのでまずはアプローチできるかどうか、上手く入城許可が取れても官憲に掴まってどこかに幽閉されるかもしれない。

この辺りを歩き廻った中村保さんの著書に掲載されている写真によれば、広大な蓮嶺の彼方に秀麗な白い裳裾の山容が浮かび上がっていて興味をそそられる。

- (2) 梅里雪山 は、今から 30 年程前の 1 月、日中合同登山隊 (日本側は京都大学学士山岳会) 17 名全員が雪崩で遭難死、海外登山史上最悪の遭難事故となった。当時は地元民にとっての聖山を登山という行為で汚したのでその罰が当たったのだとの理由で遭難者の搜索活動にも地元住民の協力が得られず、細々と独りで 15 年間も友人知己の隊員の搜索を続けてきた京大山仲間の小林尚礼さんの地味な努力と草の根外交が何とか稔って地元の人々の協力も得られるようになり、未発見の日本側隊員一人を残して遭難者 16 名全員の遺体を収容することができた。梅里雪山は現在も登頂禁止の山で未踏峰のままであるという。

この辺りの消息については同氏のご著書『梅里雪山 十七人の友を探して』に詳しい。小林尚礼さんには我々の山の会でも梅里雪山の様子を講演して頂いたので、一層思い出が深い。

私が梅里雪山に行きたいと思うのは勿論登頂の方ではなく（登頂禁止の聖山であることは勿論、小生の力で登れるような山ではないことは重々承知している）、この山を一周する順礼路（カワカブ巡礼路、全長 300km、歩行約 1 ヶ月間）を地元の人々に交じって巡礼してみたいからである。チベットの仏教徒が一生に一度は巡礼することを願っている聖地で、彼等は衣食住の全てを担いで五体投地しながら巡るのである。一家総出で廻る家族も多いらしい。手にも下駄を履き、脛には脛当てを付けて這いずり廻る五体投地は小生にはキツイが、それでも最近欧米人用に用意された専用車とホテルを繋いで廻るコンビニ・パックスツアーではなく、時々五体投地もしながら心と体に背負った重い荷物を担ぎながら聖地を巡り歩くのも冥途の土産になるのではなかろうか。四国八十八ヶ所遍路を「歩き+野宿」で 2 ヶ月間ほど掛けて歩いたが、こちらの巡礼の難易度は四国遍路の比ではあるまい。

- (3) さて次はヒマラヤである。ヒマラヤには何回も出掛けたが、上述のキャヅ・リを除いてはトッレキングに毛が生えた程度の山行、せいぜいがグンガン・ヒマールのチュルー・セントラル峰 (6584m) であった。上図に掲げたヒマラヤの目論みの残りの山々、アマダブラム、タマセルク、クスムカングル、ニルギリはヒマラヤ・キャラバン道中の途次に望めた秀峰である。標高はヒマラヤン・ジャイアンツが犇めくヒマラヤにあっては何れも 7000m に満たない程度の“低山”であるが、見事なヒマラヤ髯を纏ったその秀麗な姿には“これぞ神々の座”と思わせる威厳と風格があった。上記 4 座の内、前三者はエヴェレスト街道からよく見えた。エベレスト街道は何回も通ったので、いつも目を皿のようにして登れそうなルートを探したものだ。



(アマダブラム 6814m)



(タマセルク 6618m)



(クスムカングル 6369m)



(ニルギリ 6948m)

海坊主のような奇怪な姿でエヴェレスト街道のすぐ近くに屹立しているアマダブラムには圧倒的な迫力があつた。上空からの衛星画像で見ると、四方の支稜にそれぞれジャンダルムを従え

て屹立する主峰のピラミッドはその山容からヒマラヤのマッターホルンと言われているが、その難易度は日帰りで登れるマッターホルンに較べてはるかに難度が高い。

たまたま、ヒマラヤではボタ山クラスのイムジャ・ツェ峰に登りに行った帰途にエヴェレスト街道からよく見えるアマダブラム峰のノーマル・ルートである南西稜の様子を仔細に観察してみたがC-3までは何とか登れそうな感じであった。C-3から頂上までのルートは垂壁の氷壁となっていて相当にキツそうに見えた。

帰国後に知ったのであるが、小生がイムジャ・ツェ峰から下山したこの日に、この頂上直下の懸垂氷河上に設営されたC-3に泊まっていたスウェーデン隊が落下して来たセラックに天幕を直撃されてパーティ10名全員がテントごと標高差2000メートルの絶壁を宙に飛んで落下、下のミノ氷河に叩きつけられて死亡するという大惨事が発生していた。

この山には本当にチャレンジして見たくて、内外の登攀記録もインターネットなどで入手して詳細に調べ、またグーグルの衛星画像も仔細にチェックしてルートの研究も行った。その結果、荷揚げ、キャンプ設営、ルート工作などの作業は小生の手には負えないがこれらの仕事を現地のシェルパにやって貰えば、何とか彼らが設営したフィックスロープにぶら下がり、また氷の絶壁ではロープにビレーされれば自分自身の身体だけなら何とか頂上まで持ち上げられるのではないかと思えるようになった。

そこで、現地のエージェントに見積もり紹介をしてみると、アマダブラム登頂ガイド登山料だけで200万円、それ以外に日本からの渡航費やカトマンズでの滞在費、シェルパへの成功報酬なども含めると合計で250万円程の経費が掛かることが分かった。エベレストの集団登山の参加費が800万円であることから推測すればこの見積額は妥当であると思われたが、年金だけが頼りの極細生活を送っている我が家の大蔵大臣の認可を取り付ける自信が無い。

そこで、同じく親しい岳友のアカさんに相談してみた。小生の実力を熟知している彼は、小生のアマダブラム登頂の成功率は皆無、悪くすれば遭難死と確信していたのであろうが、心優しき御仁はそうは言わず「マ、アマダブラムは一杯手垢が付いた山だヨ。ポピュラーな山より余り知られていない山の方が値打ちがあるヨ。それに登山費用も桁が一桁違うしネ」と我が懐具合まで心配してくれたのであった。持つべきは朋である。彼のご意見を多として、当時解禁されたばかりで登頂者は欧米からの数パーティーのみ、日本人の登頂記録には見当たらず、これはひょっとして日本人初登頂かと意気込んで転進した山が前述のキャズ・リ(6186m)であった。

そのような訳でアマダブラムは断念したが、当時は詳細な登頂計画書やルート図も作成し実際には行かなくても登頂ルートの隅々まで分かっていたので、夢の中にも机上登山が顕れるようになっていた。15年程前の正月に見た初夢「ヒマラヤ・アマダブラム夢幻」で“見て来たような嘘”をご覧下されれば幸甚である。<http://yamanami-harukani.world.coocan.jp/dream/amadabram.pdf>

ヒマラヤの部が少し長くなったので、タマセルク、クスムカングル、ニルギリは割愛するが、いずれも前ページの写真で見えるようにヒマラヤ巒に覆われた秀麗な神々の座である。ニルギリはダウラギリの直ぐ東側のアンナプルナ・サーキットの北西部に位置しているが、ダウラギリが些か鈍重な姿に見えるのに比べてニルギリはシャープな山容で品格と見ごたえがあった。

チュルー登山からの帰途トロン峠を越えてガリガンダキ溪谷の源流部であるムクティナートに下ったことがあるが、この辺から南の稜線に屹立しているニルギリ連山(北峰、中央峰、南峰の3座)の真っ白な姿は秀逸であった。

(4) 南米アンデス山脈 オホス・デル・サラード(6908m)

アルゼンチンのアコンカグア峰が南北アメリカ両大陸の最高峰に確定されるまではアルゼンチン・チリ国境にあるこの山が両大陸の最高峰と思われていた。両峰の標高差は僅か52mしかないから無理も無い。アコンカグアが南北両大陸の最高峰であり、かつアプローチの手段や登山者

管理、荷揚げ、BC 施設などの登山サービスシステムが充実しているので“アンデス登山といえばアコンカグア”が定着しているためにこのオホス・デル・サラード山は忘れ去られてしまった。加えてこの山はアタカマ砂漠という辺境の奥にあるのでアプローチの公共交通手段も無い。

幸なことに、この山域にはレアメタル鉱山が散在しているので砂漠の中に道路だけは通じているようで、チリの首都サンティアゴから北方 700km の小さな町コピアポでエージェントを探してガイドを手配することになるが、さてさてこのコピアポと言う町には一体どのようにして行けば良いのか、まずはトバロからが大変なことである。しかしながら、蟻の行列ができているアコンカグアに較べれば、砂漠の山とはいえ静かな山行が味わえるのではなからうか。



(アタカマ砂漠の果てのオホス・デル・サラード)

(5) アフリカ・ケニア ケニア山 (5199m) [バリエーション・ルート]

アフリカ大陸でポピュラーな山は言わずと知れたキリマンジャロであろう。キリマンジャロへのアプローチは通例はケニアのナイロビからスタートするが、実はキリマンジャロはケニアではなく隣国タンザニアにある。かつてはケニア領にあったのであるが、タンザニアには高い山が無いのを気の毒に思ったケニアは他にケニア山という高山を持っているので、タンザニアにこの山を差し上げたのだそう。

確かに地図で見ると、北側のケニアと南側のタンザニアを画する直線の国境線がキリマンジャロの所でケニア側に突き出て折れている。アフリカ大陸はかつてはマサイ族などが自由に歩き回っていた広大な土地を、ヨーロッパの列強がそれぞれの思惑で勝手に国境線を引いて奪い取った植民地であったから、民族圏、地形、生活圏、経済圏などを考慮することなく地図上で勝手に直線を引いて国境としたのであるから、或いはこのキリマンジャロ移籍事情もそのような領土奪い合いに関係しているのかも知れない。

余談が過ぎたが、南米大陸のアコンカグアと同様にアフリカ大陸の「蟻の行列山」となっている上に、ただただひたすら瓦礫の道を登るだけの“観光地”キリマンジャロには興味が湧かないが、アプローチが困難でしかもルートもあって無きが如しのケニア山は多様な自然環境が残っている辺境だそうで、大いに興味をそそられる。

ケニア山のバリエーション・ルートは、人跡未踏の南面のジャングルの川を小舟で長時間漕ぎ、熱帯雨林のジャングルを蛇や鱷や毒虫に噛まれながら掻き分け、最後は岩壁 1000 メートルをクライミングで登って山頂に達するという壮大な登山だそう。

ケニア山⇒



お断り

オホス・デル・サラード及びケニア山の近辺には行ったことがありませんので、両山の写真はどこかの HP から無断引用させて頂きました。原作者が何方かは存じ上げませんが、撮影者に無断引用のお詫びと借用のお礼を申し上げます。